

〈図書紹介〉

和田 廣 著

『史料が語るビザンツ世界』

(山川出版社, 2006年3月, 308頁, 3675円)

ビザンツ帝国は高校の世界史において、十字軍やルネサンスといった主要なテーマと関連して頻繁に登場する。しかし千年以上におよぶその存在期間の長さ、領土増減の激しさもあって、イメージ構築の手がかりが乏しいものと思われる。

本書にある「宦官の存在は、ビザンツ社会と西方のカトリック社会を峻別するメルクマールである」, 「60名の内, 11名もの皇帝がコンスタンティノスを名乗っている」といった内容は、ビザンツ帝国をイメージするうえでの一助とな

るだろう。また、タイトルを裏切ることなく豊富に挿入されている史料を読んでいると、自ずから当時の世界へ思いをめぐらせてしまう。史料をもとに連想・推理する歴史の楽しさにあらためて気づかされる。

文献史料を、史実を確認する目的のみに用いるのではなく、それを通じて生徒が主体的に考える授業をしてみたいとなる、そんな一冊である。

藤 本 和 哉 (筑波大学附属高等学校)